



伊賀焼伝統産業会館ギャラリー



名品にも出会える伊賀焼伝統産業会館

さらに進むと右手に、水色の壁が目を引きジャンティペイクがあります。大正時代の木造建築を改築したカフェ&ギャラリーです。レトロな雰囲気空間に、伊賀焼の器がいくつも並べられています。ジャンティペイクがある交差点を南へ行くと、窯元のひとつ長谷園があります。ここでは、国の登録有形文化財でもある16連房旧登り窯が見学できます。昭和40年代までは、この16の焼却室を15〜20日間焚き上げて伊賀焼を大量生産していました。この大きさ(16連房)で現存する登り窯は、日本ではこれだけだといわれています。窯に火が入り、伊賀焼がく

江戸・昭和時代に活躍した 圧巻の16連房旧登り窯

工程、歴史を紹介する展示のほか、各窯元の作品が展示販売されています。陶芸教室も開かれていますので、旅の思い出に自分だけの器をつくるのも楽しみの一つです(要予約)。



長谷園旧事務所・大正館(休憩スペース)



レトロな雰囲気のジャンティペイク

茶陶から受け継がれた 伊賀焼を知る

名阪国道「壬生野」インターチェンジを降り、県道49号線を阿山・信楽方面へ進みます。左側に丸柱への案内標識が見えてきたら矢印(県道674号線)に従いしばらく走ると、田園が広がる集落・

丸柱に着きました。右手に丸柱郵便局を見ながらそのまま進み、「丸柱」の信号を左に折れて行くと、白壁の伊賀焼伝統産業会館があります。ここで伊賀焼を知ることから、今回の旅ははじまります。伊賀焼の歴史は古く、奈良時代までさかのぼります。桃山時代に「侘び茶」が広まると、個性的で意匠性の高い伊賀焼

は、茶の道具として注目されるようになりました。江戸時代(18世紀中頃)になると、土鍋を中心に日常雑器がつくられるようになります。それは、遠い昔に琵琶湖だったこのあたりの陶土が、火に強い特性をもち、土鍋に適しているからです。伊賀焼伝統産業会館では、現代や昔の生産

再発見

伊賀焼の文化を受け継ぐ 時を経ても美しい山里 伊賀市 丸柱

ふるさと再発見の第二十四回目は、伊賀市丸柱です。伊賀市の北西部に位置するこの地区は、四方を山に囲まれた静かな山里です。伊賀焼発祥の里ともいわれ、今も30の窯元が点在し、昔と変わらず、伊賀焼はここ丸柱を中心につくられています。また、徳川家康が伊賀越えをした経路にもあたり、歴史的にも興味深い地。今回は、自然の中で育まれた伊賀焼の文化や、歴史をたどりながら、ゆったりと時間が流れる山里の魅力を紹介していきます。



で、塩漬けにした魚(このしろ)の腹にご飯を詰めて発酵させた熟鮓が奉納されます。参道では陶製のこま犬が参拝客を迎え、ここが焼きものの里であることを思い出させます。

歴史の足跡が残る里で 現代作家の作品に触れる

来た道を戻り、そのまま道なりに行くと、丸柱に着いたときの広い道に突き当たります。丸柱郵便局が正面に見えるので、その角を左に折れ、「丸柱」の信号を越えると右手にギャラリーやまほんがあります。ここでは、「生活の中で愛でられるもの」をテーマに集められた、器や絵画、洋服、オブジェなどにあらゆるジャンルの現代作家の作品を見ることが出来ます。敷地内のカフェノカにも、キッチン用品などの身近な暮らしの道具が並べられています。

最後の目的地は徳王寺です。丸柱郵便局まで戻る途中の、小高い丘に建っています。「本能寺の変」において、堺にいた徳川家康が伊賀越えをして岡崎に戻る途中、この地で休息をとったことから、徳の二字を拝領したと伝わっています。春になると、参道の石段に桜の花びらが舞い散る風雅な趣を楽しむことができます。

伊賀焼のふるさとを巡る旅もここです。毎年5月2日から4日には「新緑伊賀焼陶器市・窯だし市」、秋には「いがやきまつり」が開催されます。窯元の作品が一同に集まるこの機会に、美しい原風景が残る山里を訪ねてみるのもいいでしょう。



春は野点茶会が開かれる徳王寺



View Point 天保三年(1832年)創業時からある、迫力のある長谷園の16連房旧登り窯



山の傾斜に沿って建てられた佐々神社



道路から少し下の場所に佇む、みの石地藏



長谷園主屋は、風格ある木造建築

この地を見守り続けた 地蔵さまと由緒ある神社

がわかる貴重な建造物です。内部公開は年に数回ですが、門から見える玄関までの立派な造りや、厚みのある重厚な茅葺屋根は、外からでもよく見えます。

伊賀焼の魅力に触れたあとは、丸柱の歴史をたどりましょう。来た道をそのまま進み山へ上っていくと、左手に「みのいしじょう」と書かれた木の看板がありました。みの石地藏は、杉の根本にある石に直接彫られた磨崖仏です。杉の根が地藏の裏のように見えることから、その名が付いたと伝えられています。昔、ここを行き交う人が手を合わせていたのでしょう。

さらに進むと、丁字路に突き当たり、その手前の右手に佐々神社があります。子宝・授乳などのご利益があり、毎年12月10日には「このしろ祭り」が行われています。300年前から続く伝統ある祭礼

ちょっと足を延ばして 音羽氏城跡

(おとばしじょうせき)

佐々神社近くの丁字路を東へ少し進むと、音羽氏城跡への登り口があります。ここから徒歩で山を上がると、音羽氏城跡があります。自然の地形を巧みに利用した城造りの様子が残る貴重な城跡で、戦国時代の城の姿を今に伝えています。



石垣が残る音羽氏城跡※



ギャラリーやまほんには、現代作家による暮らしの道具が並び

問 丸柱地区市民センター TEL 0595-44-1444

※ 印の写真は取材先から提供していただきました。